

研究室紹介 (人間探究領域)

人間探究領域

青木 孝夫先生

担当授業：芸術文化論、
美学芸術学演習など



◇ 研究内容

私は美学という学問を専攻しています。美学は一般的に哲学や倫理学や宗教学と並ぶ広い意味での哲学的学問のひとつとして考えられています。これらの学問は、相互に関係しており、総合的に研究されるものです。美学は、美しさないしは美意識、そして芸術という二つの焦点を研究する学問です。

「美」とは広義では「美しい」「かっこいい」「素敵」「崇高」「気高い」「面白い」などということであり、美学は、以上の美的な言葉が示す経験対象や経験内実の本質を研究します。それと共に、芸術の本質を研究します。美学で扱う芸術は、皆さんの想像以上に広いもので、抽象的なものでもあります。例えば芸術には演劇、映画、美術、文学など、様々なものが含まれます。もちろん音楽も含まれます。最近ではファッション、デザインに食文化なども含まれます。これらを個別に研究する学問の領域、例えば美術史や音楽学、写真論などが存在します。ここで問題になってくる基本的な問いは、「いったいどこまでが芸

術か？」ということですが、日本では、茶道も香道も生け花も芸術ととらえられていますし、武道も戦前までは芸術と考える人もいました。このような領域の画定や分類は、西洋の芸術観とは異なります。あるいは、過去には、映画を芸術とみなさないという考え方もありました。現在では異なります。このような芸術観の根拠の問題を考えるのも美学という学問です。

繰り返しになりますが、美学は「美」と「芸術」の二重の焦点を持ちます。さて、日本は明治維新以来、人文科学系の学問も、自然科学系の学問も、西洋の学問を取り入れてきました。つまり、経済、憲法、法律、自然科学など、あらゆる分野において西洋の学問を取り入れてきたのです。そうはいつても、経済学や法律学は、学問の性質上、我々の生活に直結するものですから、日本の現状に合わせて変化してきた部分もあります。しかし、美学・芸術学は我々の日常に直結するものではないと考えられ、西洋のものを受け入れて、そのまま通用すると考えてしまった面があります。しかし、たとえ文明の点で進んだ西

研究室紹介 (人間探究領域)

洋のものでも、自分自身が美しいと思えないものを美しいとは言えませんし、簡単に西洋の芸術家をお手本として追従することもできない相談の筈です。しかしながら、大局的に見て、日本の流れは、上に述べたように西歐模倣・追従の側面が表に出ていたというべきでしょう。そこに、日本の感性や芸術の伝統を尊重する人々の意義もありますし、また相互の反発や尊重があります。そこで私は西洋のことも研究しつつ、それ以上に、日本を中心に東アジアを研究し、自己の伝統の理解に努めています。私の希望は、日本の美学の研究を進展させ、そのことを通じて、西洋中心に傾きがちな国際的な美学の枠組み、学問の基盤を革新、更新することでもあるのです。もっとも、大学では、もっと具体的なことを教えて来もしました。

私が広島大学に赴任した際、演劇や映画を教える先生が不在だったので、昨年をもって終了した、総合科目の「演劇と映画」という授業を立ち上げました。当時は演劇に関して、まだまだDVD等の視聴覚機材を用いた授業は行われていませんでしたので、その点では

私が最初かもしれませぬ。学生には「能の先生」とか、「浄瑠璃の先生」とか一時期呼ばれていましたが、私は別に演劇が好きなわけではありませんでしたし、これらの分野に格別詳しいわけでもありません。ただ、日本には貴重な演劇理論が残っており、近松門左衛門や世阿弥の演劇美学を研究していたことはありました。その関連で、教室では、世阿弥の能や近松の浄瑠璃や歌舞伎を扱ってもしました。以上は、具体的な芸術学の研究でもあれば、広大での授業の一部分です。

◇ 研究をについて

美学には抽象的で、哲学的な側面がありませんし、そもそも、学生諸君の中には美学という学問があることを初めて聞く人も多いため、思います。そこで教室では具体的な作品を扱い、その作品を分析することを通じて芸術理論の基本や美学理論を教えていきます。そのための準備は決して楽しいだけではありません。一つ一つの作品を味わいつつ分析することは楽しいのですが、分析に時間をかけて

も、それを授業で紹介すると5分で終わるときもありますし、講義に上手く組み込むことは簡単ではありません。学生諸君に理解してもらえないように資料を整理しようと思うと、実際の手間だけでも、例えば昔ならコピーだけの簡単な作業でも、一枚の資料を作るのに一〜二時間はかかったものでした。「資料の大きさをそろえろ」「読みやすい資料を作れ」などと言われるのは、尤もですが、そうした単純作業に時間を割かれるのはなかなか辛いものです。

研究そのものは非常に楽しいものです。苦しいのは、論文を書くときで、論文を書くとなると、論文の書き方には作法、守らなければならぬエチケットがあります。だんだん年を経っていくと、既に十分理解していることを、面白く書きたいという気持ちも出てきますが、そうはいつても、アカデミックライティングですので、関連論文やテキストの精査など時間がかかります。他にもやらなければならない仕事がある中で、論理や筋道が通るだけでなく、表現の点でも十分推敲することができない段階で出さなければならぬの

研究室紹介 (人間探究領域)

は心苦しいことでもあります。もともと「学問的に意味がある」と思えるならば、研究者としては、満足すべきなのでしょう。

◇ 最近の研究

私は比較美学の視点で、東アジア、とりわけ日本を基軸に、西欧の芸術観や美意識との違いなどを主に研究しています。わが国には明治維新以来、西洋の芸術観や美意識が入ってきました。そのことで、伝統的な芸術観や美意識の自覚が色あせてしまった部分があります。私は日本の伝統的芸術文化や西洋以外の文化も取り入れて、西洋の芸術観に依拠しがちの芸術の定義のやり直しをすべきだと考えています。我が国では、芸術に関しては、西洋の考え方が一つの標準になっていますが、同時に、伝統的な芸術観も保持され、根強く支持されています。例えば人間国宝です。古今東西を考えれば、近代西洋の考え方は必ずしもスタンダードではありません。当の西洋諸国においても、近代的な考え方が幅を利かせすぎていると、見直しの声があがっ

ている中、私は、芸道という考え方を、東アジアの中から掘り起こし、西欧近代とは別種の芸術観として提唱しています。

このような芸術観の見直しと共に、最近関心を持っていることは、「雰困気の美学」という主題に関わる美意識の研究です。西洋では基本的に、目に見える形にきっちり作りこむことが好まれます。日本の美意識の中にもそういう部分がありますし、美術工芸などにも形を重んじた優れたものが多々あります。ただ我々は時に「雰困気」的なものを好みます。雰困気の「雰」という字は雨冠の下に分かれると書きますが、雨冠を被っている字は「雲」「霧」「霞」「雪」と様々です。これら一連の漢字は、気象現象を示します。意外なことには、日本では、何かを美しいと感じるとき、そうした経験に霧や霞や霞などが重要な役割を果たしています。例えば桜を美しいと感じる場合、桜の花を観察して賞翫するのはなく、歌にも「やよいの空は見たす限りかすみか雲か匂いぞ出する」とありますように、花の咲いている状況に参加していることを喜びます。花見といいますが、花をまじま

じと見るのではなく、花の咲いている雰困気を感じ、その世界に浸っているのです。雰困気は、匂いのように目や手で把握できない点で、あるいは移ろう点で、雲や霞と近いものです。多様な「雨」の字の関わりが示唆する美的経験のありさまを、私は広い意味での「雨の美学」また陰的「気象の美学」と呼びます。百人一首には、「村雨の露もまだ干ぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ」という歌もありました。

皆さんは、「日本では中世に夕暮れを詠む三つの名歌、いわゆる三夕の歌が生まれた」と習ったと思いますが、では、なぜ夕暮れが素敵なのでしょう。夕焼けというよりは夕暮れです。加えて、太陽のまだ十分輝かない曙も、そして夜もまた良いというのが我々の文化です。これがまた雰困気のもうひとつの系列なのです。皆さんが学校で習った『枕草子』の冒頭を想い起こしてみてください。我々はよく、「オーラがある」という表現を用いますが、人の問題ではなく、風景の問題として考えてみましょう。東アジアにおいて、この一種の「オーラ」、何とも言えない環境

研究室紹介（人間探究領域）

の味わいを形成し、また反映するものは、大気の気配としての霞であり、霧であり、夜に漂ってくる梅の香りであり、夕暮れの持つ独特の雰囲気なのです。そういうものが自然の美しさの理解のしかたに大きな役割を果たしています。そして芸術の理解にも同じ美意識が適用されるのです。そうになると、捉えどころのないあいまいな気配が良いということにもなります。例えば西洋からヌードの絵画が入ってきた時、女性の美しさを裸体画で考えることには反対がありました。なにより道徳的な理由があったのですが、そればかりでなく美学的な理由もあったと思います。一般的に言って、物事を「うっすら」「ぼんやりと」「おぼろに」「ヴェールに包んで味わいたい」という美意識があったのだと思います。こうして、気象の美学に育まれた自然の美しさへの感受性は、芸術をも対象に含む美的な感受性と深く繋がっています。この繋がりがまた、文化や時代によって様々なのです。そういうことを研究しています。

◇ 学生時代

ずいぶん昔なので自分がどのように学生時代を過ごしたか思い起こせないところがあるかもしれませんが……。格別変わった学生ではなかったですね。ごく普通の学生であつたとは思いますが、『飛翔』を見てみると、中学生の時に研究者になることを決めていたという先生方もいらつしやいます。私は何になるかはモラトリアムでした。なんとなくぼんやりと、人文系に興味がありました。が……。『何になるか』よりは、「どのようになりたいか」ということについては自分の中でもこだわりが強かったように思います。 ”How to live” に関してははっきりしていません。それを突き詰めていって、何になるかという時に、結果、なってしまったのが研究者、という感じです。自分の努力や才能とかいうものはどの社会でもある程度は反映されるものですが、反映されない部分もある。比較的努力や才能が反映されやすいのがこの仕事だろうと、研究者を選んだ時には思っていました。それはそうかもしれないし、そう

でないかもしれませんが。ともあれこの仕事に就けて今とても楽しいです。子供の時を考えると、芸術のことは嫌いではなかったかなと振り返って思います。ただ、他の職業との比較で適職かといわれると、それはわかりません。生き直すことはできませんから。目下、私自身は、自分で選んだ美学の研究や大学教師を楽しくやっています。

◇ 学生に一言

学生諸君に関していうと、私は授業のさまざまな局面を通して、専門以外のことに抱く知的興味の範囲が狭くなっているように感じています。小学校、中学校、高校と、学校で勉強してきたのですが、それ以外の知識に対して、意識、関心の持ち方がいまひとつ弱いと思います。その結果、知識の根が浅いような気がします。例えば、皆さんは周囲の大人とあまり話をしていないのではないのでしょうか。もっと、周囲の大人からいろいろな質問を受けて、あるいは質問を出して、大人が持っている常識や経験に学んでほし

研究室紹介 (人間探究領域)

いと思います。

大学の教師として私は、大学院等の留学生諸君との付き合いも多いのですが、それとの比較対照で思うことですが、広島大学の学生は、日本経済の成熟の影響を受けて、少し「お嬢ちゃん」、「お坊ちゃん」になっているところがあるかもしれません。もちろん困難な状況で学んでいる学生も依然としていますが、おおむね恵まれていると思います。

最近の広島大学の学生諸君には、以前の大學生とは異なる印象を持っています。つまり高度経済成長と共に生きてきた私達の世代と比べると、日本が上向きの時代に生きた私の青春とこれから下り坂の日本を生きていく皆さんの青春では、同じ青春、学生時代にしても大きな環境やイメージの違いがあると思います。日本は完全に成熟した社会になりつつあり、経済的な苦勞は昔に比べれば何ほどのものでもありません。現在の奨学金等の取得や返済の困難や就職活動のきびしさを知らないわけはありませんが、どんなことをしても食べていくことはできるでしょう。その中で自分がどう生きていくかについ

ては、皆それぞれの思いがあるでしょうから、私は、それに従って「好きに生きる」と言うしかありません。別に夢でも志でもよいので、それに向かって、どうぞ生きてみてください。

これからは、日本の社会を超えて活躍していくことも、ますます大事でしょうから、インターナショナルな意味において、人として通用する人間になる必要があると思います。そういう意味においては広島大学の学生諸君には、学問的にも、生きていく上でも、たくましくなってほしいと思います。よい意味で知的な好奇心を発揮し、留学の制度なども活用して、机上の勉強にとどまらず、自分の人生の幅を拓け、ためになると思うことをもつと貪欲に推し進めてほしいと思います。

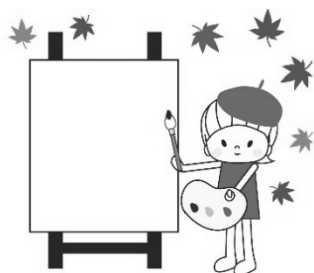
職業を通し、社会に対し、どのような貢献をしていくかについて、職業や専門に直結しないとされている大学での教養は、意外かもしれません。大学に入るこの意味は、たしかに高度に専門的な教育を受けて職業生活の基盤を形成することにもあります。しかし、それと共に大切なのは、職業生活を通し、仕事を

通して個人の人生の深みをまましていく基礎となる知性や感性を涵養することです。そういう意味では、大学での時間が、職業生活の基礎を築くだけではないことに気づいてほしいと思います。様々な本が読めたり、様々な友人がいたり、そういうことが大きな財産となります。その際、自分の中の、自分を見つめる眼を養い、大事にしてください。人間の培養そのものが、人生の楽しみと喜びの源泉です。人生を賢く深く生きて、真の意味で、人生をエンジョイするには、本物の知性が必要です。真に豊かに生きるということの意味合いを考え、実践するためにも、大学を、また大学で過ごす時間を十分に活用してほしいと思います。

【担当】 27生 小河 真里奈

27生 瀧口 健太

27生 吉川 留美



研究室紹介（人間探究領域）

人間探究領域

坂田 桐子先生

担当授業：集団力学、社会心理学など



◇ 研究内容

私は社会心理学を専門としています。社会心理学というのは、他者や社会が個人に及ぼす影響、また個人の行動が社会にどう影響を及ぼすかについて研究する心理学です。その中でも、集団内における人間の行動、特にリーダーシップについて研究をしています。具体的には、「効果的に集団を運営するためにはどうすればよいのか」ということなどを研究しています。

◇ 研究の魅力・楽しいところ

関係性や人の心の動きなど、目に見えない複雑なものを一つ一つ科学的に検証していくと、一見、すごく複雑で面白いものの中にも法則性があるということに気付いて嬉しいのです。他の理系科目のように、はっきり目に見えたり、理屈通りに整理したりできないところがあるのですが、だからこそ、データを分析して仮説通りの結果がきれいに出了た時には、「法則の端くれを見つけた」

と思えてすごく楽しいです。もちろん、仮説通りの結果が出なくても、それはそれで新しいチャレンジの始まりなので、別の楽しさがあります。

◇ 研究していてよかったこと

様々な研修会や講演でリーダーシップについて講義するときは、「すこしは社会の役に立っているのかなあ」と思います（ただ本当に役に立っているかどうかは向こうが考えることなので、解らないところはあります）。自分自身に対しては、自分の置かれた立場をある程度客観的に分析できるところが便利です。人間関係のトラブルがあった際に、関係の相関図やトラブルの構造をある程度把握し、自覚的に考えることができます。逆に、社会心理学の知識を持っていることで余計な事をいろいろ考えてしまうところもあります。なんとなく心理学の法則性をあてはめて、「この理論から見ればこの人はこんなことを考えているのかな」といった解釈を勝手にしてしまったり……。ただ、「理論

研究室紹介 (人間探究領域)

で勝手に解釈している」ということを客観的に自覚できるところもあります。

◇ 印象に残った研究

ひとつは「非公式リーダー」です。実は6〜8割の集団には、「肩書は無いもののリーダーシップを発揮している人」、つまり「非公式リーダー」がいます。この「非公式リーダー」を活かした方が集団はうまくいくという仮説を立てて実験や調査をしてみました。公式リーダーが一人で仕切っている集団よりも、「非公式リーダー」がいて二人以上で仕切っている集団の方がうまくいくようです(ただ一方では公式リーダー派と非公式リーダー派でグループが分裂してしまう危険性などもあり、これは避けなければいけません)。このように仮説が支持されると非常に印象に残ります。

もうひとつはジェンダーという問題です。私は、社会の中の女性/男性集団、すなわちジェンダーというとても大きな集団に前々

から興味を持っており、博士課程の学生時にはジェンダーとリーダーシップについての研究をしていました。「女性と男性でリーダーシップの能力に差異はなく、どちらも有能なリーダーになれる。しかし、リーダーシップがそもそも男性に適した役割である」と一般的に思われていることに加えて、女性から指図されることを嫌う人もいることから、女性リーダーが能力を発揮するには様々な困難がある」という発見をしたことが印象深いです。

◇ 学生に一言

「欲張りに何でもやる」というのが重要だと思います。研究、サークル、ボランティア、留学、「やってみよう」と思うことにチャレンジしてみてください。もちろん、無計画に何でもかんでも手を出すとパンクしてしまい、どれも駄目になってしまうこともありますので、限られた時間を上手に使うって計画的にやることを心がけてみてください。社会に出て働くようになれば、しなければいけない

こともあり自由な時間は激減します。学生のうちに色々なことにチャレンジすることで、一日の時間を上手に使う方法も覚えることができますし、自己管理能力も身につきます。自分の得手・不得手や本当にやりたいこともわかってくると思います。それらは社会に出てもきつと役立つ宝になります。

【担当】 27生 上田 明子

27生 後藤 春菜

27生 古川 幸実

27生 山岡 菜緒



研究室紹介(自然探究領域)

自然探究領域

齋藤 祐見子先生

担当授業：脳と行動、生物学実験、生物学実験法、基礎細胞生物学、脳科学、総合科学演習など



◇ 研究内容

神経細胞の細胞膜に存在している受容体（タンパク質）、特に食欲やうつ不安に関係（メラニン凝集ホルモン受容体（MCH受容体））について研究しています。手法としては分子生物学や生化学が中心です。まず、受容体とリガンド（受容物質）について話しておきましょう。リガンドとは「鍵」、受容体とは「鍵穴」と例えることができます。つまり、両者が対応するものでなければ、その物質を受容することはできません。MCHとは元々、魚類の体色を明るくする生理活性物質として日本人により発見されたものです。ところが哺乳類では体色ではなく、食欲に深く関与していることが分かりました。また、MCHは鬱や不安などの情動（人間の心の動き）、さらに最近では睡眠にも関わっていることも明らかになりました。一見、食欲と情動と睡眠の問題は無関係に思えるかもしれませんが、そうではありません。あなたも気分が落ち込んだ時、眠れなくなってしまうことや、食べられない（もしくはドカ食いする）とい

う経験をしたことがないでしょうか。MCHは間脳視床下部の神経細胞に非常に多く存在しています。また、MCH受容体の存在する位置（伝達信号の伝わる経路や場所）によって食欲・情動・睡眠などの異なる現象をコントロールしていると考えられています。これらがどのような仕組みで働いているのか、MCHの「受容体」レベルで解明しようとしています。少し前にはMCH受容体の働きを調節するタンパク質も見つけたので（RGS8）、RGS8遺伝子を遺伝子工学により増やしたマウスを作成し、うつ不安を含めたいろいろな行動実験を行っています。

◇ 研究を始めたきっかけ

まず研究職に就いたきっかけを話します。私は大学院修士課程ではクラミドモナスという生物の繊毛運動について生物物理学的観点から研究を行っていました。しかし、山のように実験してもデータが安定しません。そこで、「自分には研究の才能がない」と判断し、映画会社に就職する道を選びました。

研究室紹介(自然探究領域)

しかし、まあいろいろなことがあり、30歳の時、ある覚悟を持って、研究職に舞い戻りました。次に今の研究を初めたきっかけを話します。研究再開時、同僚と議論した結果、「これからは脳の時代かも」と考え、神経細胞を使った研究をひとりで開始しました。神経細胞の突起が伸びる現象を詳細に追ったところ、幸いなことに伸長を著しく誘導する新しい薬物を発見し、博士号を取得しました。さらに、神経細胞突起の長さを調節できる新規な脳特異的タンパク質も見つけることができました。しかし、同時期にScienceというインパクトの高い国際誌に私と全く同じ物質が論文として載っていたのです。それを研究所の図書館で見た瞬間、全身から血の気が引きましたね。その論文は私の方法とは全く違うアプローチで単離され、さらに「痛み」にも関係するという生理的意義まで追求していました。この論文を見た後では「研究者として生きていくには、このままここにいても良いはずがない」と反省。そして、常勤職（東京都職員）を休職し、海外へ向かいました。この選択は私の人生を決めたと思います。

なぜなら、今研究しているMCH受容体はアメリカで働いているときに同僚と切磋琢磨する過程で発見したものであり(MCH受容体の正体はそれまでは不明でした)、この受容体が単離できなければ、私は広島大学に来ることはなかったのですから。

◇ 学生時代

大学一年から卒業までの学部生時代のことでですね。これを一言で表すと、世間知らずで小生意気。つまり、教員に自分が何をどう考えているかをオープンに話す学生でした。例えば、私はウーマンリブ運動(今でいうフェミニズム)に並々ならぬ関心を持っていたため、女子学生だからといって優遇されることをとても嫌い、男子学生とすべての面において同等に扱うことなどを要求しました。昨年三月には、大学時代の教員から「斎藤さんくらい生意気な女子学生はあれ以来出てこないなあ」と懐かしそうに、お褒め(?)の言葉を頂きました。一方、サークルは三年間フルにスキー山岳部に所属し、夏はアルプス

縦走三昧、冬は山スキーという激しいながらも楽しい日々でした。学部時代の勉強について?それについてはちょっとこの場では(汗)。

◇ 趣味・息抜き

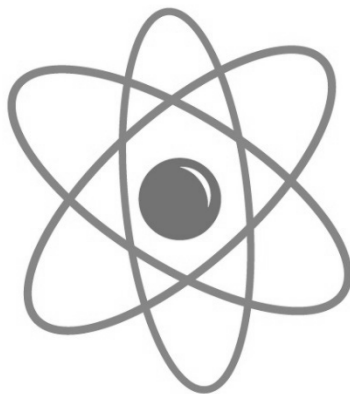
「インドア」映画会社に就職したという秘密の過去を持つということ(もう秘密ではない)、今でも映画がとても好きで、どんなに忙しくても一週間に最低2本は映画を見ます。中でも、洋画は見て楽しむだけでなく、耳を慣らすことにもなるので英語の勉強にもなります。「アウトドア」西条近辺の丘や低山を歩き、植物を見つけ、その分類を試みることです。ここ広島県には、私の出身である東京の下町では見たことがないような植物、例えば様々な種類の野生ランやスマレが自生しています。さらに、東京では見たことがない昆虫もたくさんいるので、身近に自然を堪能できる西条に着任できて、本当に幸せです。

研究室紹介(自然探究領域)

◇ 学生に一言

まずひとつは、ちょっとだけ生意気になつてみるのはどうでしょうか。逆らうのが怖いという思いもあるのかもしれませんが、それがあなた自身でとてもよく考えた末の主張であるなら、welcome。本音でぶつかり合わない不満がたまる一方です。次のメッセージとしては、何でも良いので好きなことをみつけて徹底的に打ち込んでほしいと思います。ヒトは自分が思っている以上に能力を持っていますから、限定しないでチャレンジしてみても如何でしょうか。最後のメッセージは、人と違うことを考えるクセをつける、ということでしょうか。皆と群れて行動し、同じ意見を発する、これはストレスフリーですが、平凡の域を越えないステレオタイプな思考法に陥りがちです。周りの皆とは一味違った考えを持つと風当たりも少しだけきつくなりますが、かえって打たれ強い人間になるかもしれません。そして、そんなあなたにはきつと明るい道が開けると思っています。

【担当】 27生 清丸 峻



研究室紹介(自然探究領域)

自然探究領域

山田 俊弘先生

担当授業：保全生物学、
自然環境実験法 A、自然環
境実験 など



◇ 研究内容

「熱帯林の生態系を守る」ということを目標として研究しています。今現在、熱帯林の半分が商業伐採を受けた林になっています。残りの半分は原生林ですが、そのほとんどが生産林の指定を受けているため、近い将来商業伐採される運命にあります。すなわち商業伐採後の森林の割合はこれからも増えていくと考えられます。「環境に配慮して」、「生物多様性に考慮して」という聞こえの良い言葉と共に熱帯林での商業伐採は行われ、それはあたかも持続可能であると謳われています。しかし、実際にそれがどの程度環境や生態系に影響を与えているのか、そして本当に持続可能かどうかということは分かっています。そのような曖昧な状態でこの先も熱帯林の商業伐採を進めると、未来には熱帯林生態系が激しく劣化し、生物多様性が損なわれてしまうかもしれません。そうなってしまわないために、環境や生態系にどこまで配慮すれば良いのか「具体的」な基準を設けることが必要だと考えています。例えば、

私たちの研究で商業伐採時に造られる林道が熱帯林生態系、特に生物多様性に大きな影響を与えることが明らかになりました。林道の密度や道幅が少し違うだけで、その場所の生物多様性が大きく変わってしまいます。そこで私は、林道建設は最小限にする必要があると考えています。具体的な基準として四十^三三^三という林道密度を提案しています。この林道密度は一般的に熱帯林で行われている商業伐採林に比べるとずっと低いものです。慎重に計画を立てれば十分に実現可能です。こういった実現可能な具体的な基準を一つでも多く提案できる様に、自らが自然に触れ、実際のデータを採取し、研究をしています。

◇ 研究を始めたきっかけ

元々自然について幼い頃から興味がありました。学生時代に熱帯林の調査に初めて行った時、その光景に面食らってしまいました。そこには、名前も覚えきれないほど数多くの草木や生物がいて、「とてもじゃないが

研究室紹介(自然探究領域)

こんなことを研究しても分かるはずがない」と思っていました。しかし、滞在しているうちに、熱帯林の生物多様性の複雑さに惹かれてきました。帰国時にはまだ帰りたくない！また来たい！と思うほどはまってしまいました。それ以降毎年熱帯林を訪れていますが、年を重ねるごとに熱帯林が消えていくのを目の当たりにするようになりました。それまで調査をしていた森林が、ある年急に焼畑に変わっていたことも珍しくありません。そこで、人間と共存できる自然のあり方を見つけないかと思い、現在の研究課題に取り組みようになりました。

◇ 学生時代

学生時代とても好きだった授業は生態学の授業でした。その授業は、資料を読み合わせ、それに対して生態学的な解釈を加えるという内容でしたが、「自分も教授と同じような説明ができるようになるぞ」という意気込みで日々復習に励んでいました。そのため、復習はとても大変でしたが、分からない所が

あれば度々教授に質問に行き、少しでも教授の説明に近づけることに喜びを感じていました。

◇ 趣味・息抜き

美術館で絵画を見ることです。幼少期に両親によく美術館に連れて行かれ、当時はそれがとても苦痛でした。しかし、自分でもよくわかりませんが、高校生ぐらいから自らの美術館に足を運ぶようになりました。そしてそれが今となっては趣味になり、最近は毎週のように美術館に足を運んでいます。ちなみに、フランスのニースにマルク・シヤガール美術館を目的に行ったこともあります。それぐらい美術館が好きです。

◇ 学生に一言

大きく分けて二つあります。一つ目は、大学生である以上、勉強を軸に生活のスケジュールを組むことです。余った時間で、サークルやバイトなど別の活動をするのが良いで

しょう。あなたたちは、勉強できる機会をみんなにも与えられた大学生なのでから、それを最大限に活用してください。二つ目は、選り好みせずにもまずやってみる事です。総合科学部であるあなたたちは、たくさんの方とを学べる環境にあります。自分が今、興味のある分野だけを学ぶのが悪いとは言いませんが、今の自分にはあまり興味のない分野にもチャレンジしてみるのもよいと思います。そこには、あなたの知の好奇心を掻き立てるものが必ず待っているはずですよ。

【担当】 27生 馬野 保希

27生 大崎 壮巳

27生 小川 巧



研究室紹介(社会探究領域)

社会探究領域

匹田 篤先生

担当授業：社会情報メディア論、博物館情報、メディア論など



◇ 研究内容

僕らが日ごろ当たり前だと思っていることが、他の人には通じないことなど、コミュニケーションにおけるコンテキスト・共通理解の役割を研究しています。コミュニケーションというのは、人々の文化背景やコンテキスト(文脈)と密接に関係があります。「Z世代」などのSNSでは思いがうまく伝わらないことがありますよね。そういう思いの齟齬は世代などのせいばかりではなくて、共通の文化背景が違うから通じないのです。地図や信号のような公共空間は誰が見てもわかるようにしなければ意味がないし、それでもわからなければ伝わらないことを前提にしないといけない。そういったことを学校で教えるのがメディア論であって、誰がどのように教えるのかというのを考えるのも実は重要です。その中でも、役所や博物館、図書館、ショッピングセンターや駅などの公共空間でどういうメディアを提供していくのかを考えています。集合住宅のような一般の人が入ることができない空間よりも公共空間に興味

があります。地図には、わかりやすい地図とそうでない地図や見えていて楽しくなる地図と何とも思わない地図があります。例えば、西条駅を降りたとき最初に見るのは地図なので、そこで「〜に行ってみたい」などと都市の魅力を感じるかは地図のイメージによって変わってくると思います。地図の縮尺や配色、どんな名前を付けるか、どう紹介するか、など観光のことだけではなく人々に街の歴史に興味を持ってもらうような公共空間における情報提供の工夫をしています。

あとは広大のパンフレットの地図の作成なども行なっています。学校の地図製作では、広報というよりどういうデザインで伝えるか、受け手の用途を明確にイメージすることに重きを置いています。

◇ 地図研究のきっかけ

僕は学生の時物理理論物理を勉強していました。物理の、複雑なことをなるべく単純に説明しようとする心意気に惚れていたというか：(笑)それはデザインも同じで、デザ

研究室紹介(社会探究領域)

インについて細々と言うけど結局は一言で説明できたほうが美しいと思っています。

また、90年代に大学にネットが導入されてその末端の管理者をすることになりました。物理学科のネットワークなんかを作っている、マンシヨンの管理人みたいで楽しいと思えてきて(笑)片手間に、ネットワークの運営管理として会社のインターネットの使い方を助言する仕事をしていて、「これからはウェブを作る時代ですよ」なんて啓発していました。

それが広島大学の目に留まり、二〇〇一年にこちらにきたというのが、物理学と今のメディアがつながった経路ですね。

◇ 学生時代

学生の時はプログラムを夢中になって書いていたときがありました。そうやって熱中できるのは大学生・院生の特権だったと思う。熱中する癖がつくと抜けられないものだし、色々なことに熱中して背伸びしてみたらいいと思う。あとは、大学二年生の時に8時間

寝ても眠かった時があつて、寝起きの瞬間が辛いなら寝る回数を減らせればいいのではと思つて、一か月間だけ試しに二日に一回だけ寝てみました(笑) なぜかその月だけ早く終わった気がしたけど、楽しかったですよ。二日に一回は夜じゅう好きなことができませんでしたしね。

◇ 学生に一言

「背伸びをしよう」背伸びした分だけ大きくなれます。失敗しても身の丈に合っていないかたたと気付いて笑えますし、それでも成長できるかもしれませんね。それに自分にとって、やりたいことが見つかるきっかけになるかもしれません。背伸びの楽しみを知って、人と違って熱中できることをたくさん持っている人が楽しく生きていけると思っています。職業を選ぶのもそれに近くて、世界の役に立つかどうか考えるのは後付けです。それは部活やバイトにも通ずるものであつて、みんなよりできるようになると楽しくなり始めて、疲れたつてことよりも楽しいつて思う気持ち

ちのほうが大きくなるんじゃないですかね。国立大学つて四年間何もやらなくても済んでしまつたりするから、「やらなければ(受動)」を「やってみよう(能動)」に早いうちに意識できればきつと大学生活は楽しくなりますよ。

◇ 好きな場所

移動している空間、クールだけど温かみのある都市(香港、プラハ、ロンドン、ベルリン)

◇ 休みの日

まち探検、以前は古い車の修理

◇ 好きな音楽

邦楽では細野晴臣、洋楽だと Bryan Ferry、最近では Jessie Ware

研究室紹介(社会探究領域)

社会探究領域
レヴィ＝アルヴァレス・
クロード先生

担当授業：教育と権力の社会
学、移動と統合の社会学、フラ
ンス語会話演習



◇ 研究内容

教育社会学を専門に研究してきました。教員が学校に入ってからいかにして教員になるのかという教員の職業的社会化についての研究です。教員が着任してから、何を経験して、どんな関係の中で自分の仕事を覚えていくのか。このような一人の教員が一人前になる過程を見ていきます。その過程を観察する中で、「学校とは何か？」という課題に直面します。学校とは教員なのか、教育委員会なのか、国なのか。実際に現場に赴きインタビューや資料収集を通して、学校の日常をゼロから観察することで「学校とは何か？」という問題を考えていきました。また、国の教育政策が学校現場にどのような影響を与えているかということもフィールドワークを通して観察しました。このように、教員を中心とした形での学校の在り様や日常がどのように成り立っているのかを詳細に理解することが私の十数年間の主な研究内容となりました。

◇ 研究のきっかけ

十八歳で自立し、それ以降いくつかの仕事を経験しました。来日するまでの最後の九年間は視聴覚関係の教育現場で働いていました。二ヶ月の夏休みを利用して子どもをキャンプに連れて行くという教育運動に関わっていました。その頃、夏の子供の過ごし方と、学校での教員の活動の充実化などを目指す協会(Association)の運営員の一人として、教育関係の仕事に携わる機会を多く得られたのです。

日本語を勉強し始めた時、それがきっかけとなって、日本とフランスの教育制度を比較研究してみたいと思いました。私自身、「教育とはなにか」ということを研究対象として見なしており、「教育って素晴らしい！」と言いたいわけではではありません。教育は人を育てるだけではなく、一つの基準に基づいて人を振り分けてしまうものでもあると考えるからです。というのも、何を基準に人を順位づけるのか、この序列の作り方が教育社会学を研究する中で大きな関心事です。

研究室紹介(社会探究領域)

◇ 学生時代

十八歳から仕事に取りかかっていたため、はつきり私には“学生時代”と呼べる時代がありませんでした。しかし、一九六〇年後半以降の学生運動の盛んな時期を体験したもので、学校教育に対して関心と疑問を抱いていました。また、当時のインテリ層の間では物事を考える上でフロイド系の精神分析(psychanalyse)が大変重視されていました。私にとってその影響が決定的なものだったと思います。大学に通う決断、日本の文化と言語との出会いなどが、その結果でしょう。

◇ 趣味

ギターですね。十四歳からギターを始めて、二十二、三歳の時にはプロの道を歩むために有名な音楽学校に入ろうと考えたこともありましたが、その時代はクラシックギターがとても流行った時代で、僕よりも年下だけどころな学生がたくさんいたので門前払いされてしまいましたけどね。僕の父と祖父が音楽

や映像関係の仕事をしていたり、祖母が有名なオペラ歌手であったりして、周辺に音楽の話が多かったはずですが、なぜか楽器を覚えさせることにはつながりませんでした。結局、僕は友達からギターを習いました。その友達には良い先生がついていたから間接的に良い先生から習うことができたと言えるでしょう。プロの道をあきらめてからギターを再び引くことになっています。最近ではフラメンコも習っています。今は忙しくて時間が十分に取れませんが、今年の十月にはギター研修で知り合った若手の素晴らしいフラメンコギタリストが広島を訪れるので、いま、そのコンサートの準備を手伝っています。

◇ 苦労したことや困ったこと

苦労したというほどではないけど、僕の妻は最初日本に来た時、日本語を話せなかったので学校に通って日本語を習っていました。しかし、一緒にお店に行くと、店員さんは僕が話した後、いつも彼女に確認をとりました。

彼女が東洋系の顔をしているからです。彼女は何も分からないのに、僕が話したことへの返事がすべて彼女の方に返ってくるのです。今は少し変わってきたけど、そのような白人だから通じないという思い込みがあったのでしょうか。日本はこのような思い込みが多い国です。とても閉鎖的なところもあって、僕は永遠に「日本に来たばかりのお客さん」という位置から抜け出せないことを覚悟しておかないといけないのかなと思います。三十年間日本で生活していますが、日本人の無意識な排他性は変わりません。ただの「一人の人間」になれず、いつも「特別」という扱いにすごく疲れますし、不満もあります。でも一方で、ここには一つの優しさや生活のしやすさがあるのも確かです。

◇ 学生に一言

生きるの一回きりです。人生には意外と多くの可能性があります。僕も色々なことに出会い、経験積んだので思うことなのですが、本当はまだ何も決まっています。何も決ま

研究室紹介(社会探究領域)

っていないのだから、ものを恐れずに冒険に走ってください。何に對してもいいのでもっと積極的に、もっと精一杯生きてほしいと言いたい。

就職をどうしようとか三年になってまだ内定が決まっていないとか、不安の中に生きるみなさんを見て悲しく思います。確かにとても厳しい社会になってきたことは間違いありません。でもそこで自分を押し殺してしまつと、自分の存在意義が分からなくなつてしまいます。今の一番自由で、時間のあるときをものにしないで、いつ自分が成長できるのでしょうか。みんなが自分の意志を持って生きていくこと自体が今後の日本社会のためにもなると思います。人の声に耳を傾けつつ、自分の声にも傾ける……この二つを両立させるのは難しいかもしれませんが、相手を尊重しながらも、あきらめず自分の人生を歩みつつける人間になつてほしいです。

【担当】

匹田先生

27生 永原 花菜

27生 溝口 奈都

27生 森 みずき

クロード先生

27生 佐藤 大志

27生 中村 励

27生 堀田 悠輔

27生 松井 健太

INFORMATION

